

中経 論壇

経営支援NPOクラブ理事

吉田 仁



つたのは、4月の屋台大学での講演である。

「それ尺も短き所あり、寸も長き所あり、君が心を用い、君が意を行え」―私は高校時代に、この屈原作という楚辞の言葉に触れたとき強烈な印象を受けたが、常に自分の考へ方に磨きをかけ、社会に主体的に関わっていくことはなかなか大変なことである。長い会社社員生活の中で、そうした態度が薄れ、時流に身をまかせてきたように思う。最近、自ら考え行動することの大切さを思い起すきっかけとな

内田洋行のCSR活動としての屋台大学については、以前に、本欄で紹介したが、その開催の基本に流れる理念は、物事は黒か白かではなく、その中間に多くの答えが存在するということである。それは、例えば芸術と工学の融合により素晴らしい製品が生まれるという実例の提示であったり、経済至上主義への反省という形で問題提起されたりする。人間の多様性を前提として、一人一人がどう判断し、どう行動すべきかを考えるよ

バベルの塔を築かんとする人間の放漫

屋台大学に参加して(2)

うに、屋台大学は構成されている。勢力が存在するのだ。私たち日本人は、より快適な生活を求め、経済合理性を追求する中で、安い外材を輸入し利用してきたが、それはアマゾンや東南アジアでの森林破壊につながった。それが自然環境のバランスを崩し、思わぬ疫病をもたらすことにもなった。人間がエボラ熱に感染したのも森林破壊が遠因という。人間の幸福の追求が、人間に災厄をもたらしてしま

つたのである。環境破壊は、人間の傲慢の表れであり、第二のバベルの塔を無意識のうちに築いてきたのかもしれない。自国の利益追求を第一とする政治風潮が世界的に見られ、パリ協定を否定する動きもある中で、地球環境保護への姿勢が非常に重要だと改めて考えさせられた。西原氏のような活動に及ぶべくもないが、省エネなどの面で、これまでの生活態度を謙虚に見直すように思っている。

4月の屋台大学では、アフリカで活動されている西原智昭氏が、地球環境を守る立場から、温暖化の実情と温暖化対策を否定するアメリカのロビー活動の実態を説明された。アマゾンの森林伐採や北極の氷山の崩壊の映像など、これまでに目にしたことのあるのだが、体系的に示されると地球が悲鳴を上げているように、衝撃的であった。それなのに、森林伐採によるCO₂増加が、地球気温の上昇を招くという科学的事実を認めない政治

環境破壊は、人間の傲慢の表れであり、第二のバベルの塔を無意識のうちに築いてきたのかもしれない。自国の利益追求を第一とする政治風潮が世界的に見られ、パリ協定を否定する動きもある中で、地球環境保護への姿勢が非常に重要だと改めて考えさせられた。西原氏のような活動に及ぶべくもないが、省エネなどの面で、これまでの生活態度を謙虚に見直すように思っている。